

湘南医療大学 ティーチング・ポートフォリオ

大学名 湘南医療大学

所属 リハビリテーション学科

名前 大森圭貢

作成日 2025 年 4 月 21 日

1. 教育の責任

私は、湘南医療大学保健医療学部リハビリテーション学科理学療法学専攻学生を対象に、科目責任者として、日常生活活動学(必修、2 年後期)、運動器系理学療法学(必修、3 年前期)、日常生活活動学演習(必修、3 年前期)、理学療法管理学Ⅰ(必修、3 年前期)の授業を担当してきた。またオムニバス科目の科目担当者として、理学療法教養基礎(必修、1 年前期)、理学療法特論Ⅰ(必修、3 年後期)、理学療法特論Ⅱ(必修、4 年後期)の授業の講義と演習を行い、また実習科目の科目担当教員として、見学実習(理学療法)(必修、1 年前期)、評価学実習(必修、3 年後期)、地域リハビリテーション実習(必修、3 年後期)、総合臨床実習Ⅰ(理学療法)(必修、4 年前期)、総合臨床実習Ⅱ(理学療法)(必修、4 年前期)の指導と評価を行ってきた。

理学療法学専攻における分掌としては、これまで教務委員会、学生支援委員会、そして図書委員会の委員を受け持ち、また保健医療学部と薬学部の共通科目であるチーム医療論(必修、4 年後期)のワーキングメンバーのリーダーなどを行ってきた。

これらの教育活動を通して、本学のディプロマポリシーを満たす学修、理学療法士国家試験に合格する学修の支援を行ってきた。

2. 私の理念・目的

1) 私の理念

卒業する学生のほとんどは、障害を有する者の心身機能の回復、活動と社会参加の再獲得を目指す病院や在宅医療の場に就職している。これらの場における理学療法の対象は、発症間もない急性期の医学的状态が不安定な者から、生活期にいたり、状態が安定し、獲得した心身機能や活動、参加を維持・拡大したりしようとする者まで幅広い。このため、理学療法学専攻学生には、まず多くの対象者に対応した理学療法を提供可能なジェネラリストとしての理学療法士として活躍できる教育を心掛けている。そのために、解剖学、生理学そして運動学といった医療の基礎と関連づけて理学療法の知識と技術を学修する教育を心がけている。それに加え、チーム医療や医療の進歩によって、高度な専門性を有するスペシャリストとしての理学療法士が求められている。スペシャリストとしての理学療法士の役割と必要性そしてその存在を教授している。さらに理学療法の対象となるほとんどが、思いがけない疾患の発症や受傷を契機に障害を抱えた人々であり、その後の身体や生活に不安を抱く当事者や家族は多い。このため患者、利用者そしてご家族の声に耳を傾ける必要性和その意義を、科学的根拠を基に教育することも不可欠と考えている。

2) 理念をもつに至った背景

私は、理学療法士になってから 20 年間で大学病院で理学療法士として従事し、その後、大学教員となった。大学病院時代は、様々な状態の患者を担当し、ジェネ

ラリストな理学療法士と、スペシャリストな理学療法士の双方の必要性を実感した。

理学療法には、疾患に関わらず、すべての患者に共通して行うべき評価と実施すべき理学療法があり、これはジェネラリスト、スペシャリスト双方の基本となると考えている。そのため、まずはこのことを学部での教育、臨床実習などを通して、学修させるべきと考えるようになった。

他方、一般に多くの患者には求められないが、疾患による特異的かつ専門性の高い理学療法も必要になる。特に急性期に携わる理学療法士は、多種多様な複数の情報を解釈して患者の状態を推察し、また理学療法の実施によって生じる事象を想定し、対応するなど、専門的な臨床の場での実践と継続した学習が必要であり、学部での教育や臨床実習でのこのような理学療法士の学修は難しい。しかしこのスペシャリストな理学療法士は、病院の機能分化や入院期間の短縮などの社会的背景の変化によってますます求められている。このような背景から、専門的なスペシャリストについても理解をしてほしいと考え、前述する私の理念に至った。

3. 教育の方法・戦略

科目責任者を務める授業の対象が2年生後期と3年生前期の学生である。このため、大きく2つのことに配慮をして授業を行っている。

ひとつ目は、新たに教授する知識・技術を、2年次前期までに習得した解剖学・生理学・運動学の知識と関連づけて示すことである。得られた知識を記憶するには、「記銘」、「保持(貯蔵)」、「想起」という3つのプロセスがある。「記銘」とは、「覚えること」、すなわち脳に情報をインプットすることであり、「保持」とは、脳がその情報を維持し続けることである。そして「想起」は、脳の中にある情報を引き出す「思い出す」ことである。記憶をするには、この「記銘」、「保持」、「想起」の一連の過程を反復することが必要である。しかしながら、学生は「記銘」、「保持」された知識を、「想起」する機会は少ないと考えている。授業において過去に学修した内容に触れ、「想起」の機会を設け、想起の可否にかかわらず、「記銘」、「保持(貯蔵)」、「想起」の機会を設けている。なお、学生が「想起」をすることが難しい場合には、音声言語や非音声言語による手掛かりを示し、最終的には学生自ら想起に至り、表出できるような無誤学習過程となるように配慮をしている。また小テストを行い、重要な項目を反復する機会を増やしている。

ふたつ目は、授業中は、学生の表情を観察しながら進めることである。これまで学生個々の知識の量や理解の量には大きな差があることを経験してきた。知識の量が多く、理解が進んでいる学生に合わせて授業を進めた場合には、知識の量が少なく、理解の進みが遅い学生は、より知識の蓄えは難しくなり、理解も滞ってしまう。授業を受けたにもかかわらず、理解できなかった、分からなかったという経験は、その後の授業の出席、聴講に負の作用をもたらすと考える。そのようなことがないよう、学生の表情を観察し、理解ができていないようであれば、かみ砕いた説明を改めて行うようにしている。なお、講義や演習で用いる口頭での説明は、学生の聴覚把持能力に頼るものであり、

情報を記憶するための刺激としては、すぐに消失する特徴がある。このため視覚的にも十分な刺激となるように、写真や映像を駆使している。このような教材は、教授した知識や技術が臨床の場でどのように活用されているかの擬似体験として、また障害像の理解のため、言葉では伝わらない臨場感を示すことに役立っている。

4. 学習成果

- 2021 年度、2022 年度、2023 年度と 3 年連続して理学療法士国家試験受験者の合格率 100%。2024 年度の合格率は 97.7%と、全国平均の 95.2%に比べて高い結果を維持している。
- 大学院修士課程指導学生の論文発表 6 件
 - ✓ 山本真広, 大森圭貢, 森尾裕志, 川越潤一. 理学療法士のストレス対処能力と理学療法臨床能力の関連. 理学療法教育. Vol.5, No.1, 2025
 - ✓ 大内佑太, 城所亮多, 衣田翔, 大森 貢, 森尾裕志. 変形性膝関節症を有する女性患者の階段昇降速度と身体的・心理的因子の関連性. 理学療法:技術と研究、53;55-60、2025
 - ✓ 原田真二, 森尾裕志, 大森圭貢. 心臓手術後患者に行われる退院前の歩行能力および身体機能の評価指標—文献調査—. 専門リハビリ,22.31-40,2024
 - ✓ 清野由也, 大森圭貢, 城所亮多, 長澤弘. 脳卒中患者の身体活動に関する研究の動向. 理学療法:技術と研究、50;39-52、2022
 - ✓ 最上谷拓磨, 大森圭貢, 松嶋真哉, 小野寺英孝. 脳卒中患者の ADL 回復に関連する栄養指標の文献検証. 理学療法:技術と研究、50;77-84、2022
 - ✓ Takuma Mogamiya, Yoshitsugu Omori, Junichi Kawagoe, Takuto Kaneda, Shinya Matsushima, Hidetaka Onodera. Association of Activities of Daily Living with Body Weight Change 3 Months After Stroke Onset . J Stroke Cerebrovasc Dis. 31(8):106573.2022
- 大学生に対する教育方法、大学生の健康感に関する共同研究発表 2 件
 - ✓ 中村壽志, 大森圭貢, 下田栄次, 坂上昇. 知識構成型ジグソー法による学習と動機付けの変化—理学療法士国家試験の学習における成績ごとの特徴. 理学療法科学. 37(5):489-494.2022
 - ✓ 中村壽志, 大森圭貢, 大矢暢久, 下田栄次, 坂上昇. 早期臨床体験における主観的健康感の変化 本学理学療法学専攻 1 年生への調査. 専門リハビリテーション 19 巻 53-57、2000

5. 改善のための努力

- ✓ 科目に費やす勉強時間数が短い

教授する内容は必要最低限とした。その結果、勉強時間の平均は他の科目の全体平均より多くなったことを経験した。授業においては、基本となる事柄を中心に教授していく。さらに学生が疑問を感じた際に、自己解決しようとする教授量、教授の範囲などを模索していく。

- ✓ 板書平均、環境平均は全体平均と同等である

板書を用いる機会は少ないが、板書した内容はほとんどの学生が資料などへの書き込みを行っている。理解を深めてほしい点については、資料への記載に加えて板書し、学生自らが記録する機会を設ける。

6. 今後の目標

長期目標

高齢化や医療技術の進歩、医療に対する意識の変化などにより、理学療法士に求められる能力が高まっている。プレシジョン・リハビリテーションやモバイル・ヘルスそしてゲームフィクションなどの工学や心理学との融合したリハビリテーションの重要性も認識されてきており、理学療法士免許後の継続した生涯学習が求められている。本学は、修士課程、博士後期課程を有していることから、疑問や課題を研究という手法を用いて解決を考えることのできる教育環境が整っている。修士課程、博士課程へと進学し、就職後の臨床経験と通して生じる疑問や課題解決を図る卒業生を増やしたい。

短期目標

理学療法学専攻の学生の最終目標は、理学療法士国家試験を受験した学生全員が、合格することである。理学療法学専攻では、2021 年度、2022 年度、2023 年度の理学療法士国家試験を受験した全学生が合格している。2024 年度は合格率が 100%を達成できなかったため、国家試験対策である理学療法特論Ⅱの科目担当教員として、2025 年度の理学療法国家試験受験者全員合格を達成することである。

【添付資料】

- ✓ シラバス
- ✓ 開発教材(内部障害理学療法学テキスト、南江堂、東京. 標準理学療法学 日常生活活動学・生活環境学、医学書院、東京.)
- ✓ 学生アンケート
- ✓ 発表論文
 - 1) 山本真広, 大森圭貢, 森尾裕志, 川越潤一. 理学療法士のストレス対処能力と理学療法臨床能力の関連. 理学療法教育. Vol.5, No.1, 2025
 - 2) 大内佑太, 城所亮多, 衣田翔, 大森 貢, 森尾裕志. 変形性膝関節症を有する女性患者の階段昇降速度と身体的・心理的因子の関連性. 理学療法:技術と研

究、53;55-60、2025

- 3) 原田真二, 森尾裕志, 大森圭貢. 心臓手術後患者に行われる退院前の歩行能力および身体機能の評価指標—文献調査—. 専門リハビリ,22.31-40,2024